

昭和63年 7月20日

同窓生シリーズ⑥



寺内大吉氏(本名 成田有恒)

旧13回生(昭和14年卒業)
 浄土宗大吉寺住職・作家
 大正10年東京生まれ
 昭和35年 はぐれ念仏 著
 著書: はぐれ念仏、名なし如念、死は明日こない、ひじり三國志、浄土物語、崇伝、上・下

「ねて暮す会」
 六中時代の人間関係を象徴しているのが、毎月

六中時代を、友人を、人生を語ってくださいました。

世田谷の町 十三日、年に十二回も開かれるクラス会「ねて暮す会」である。すでに四十年近く、欠かさず開かれています。四年生までクラス替えが一度も訪ねた。氏 はスポーツと 誦経に鍛えられた張りのあ る声で、穏やかに、時には 伝法な言葉に 限りない慈しみをこめて、

日産の社長の久米君など 多忙にもかかわらず絶対 に来る」と言われるよう に、死の世界へ行った彼 友も同席のクラス会は、 クラスメートの間情その

詰め込みとゆとり 寺内氏が在学中のはじめの二年間は、六中初代校長阿部宗孝先生の下、ユニークな催しが行われていたという。四月八日には花祭り、四月十四日の午前中は講釈師に来てもらって「赤穂義士」を聴き、午後は泉岳寺へ義士のお墓参り、節分には力士を招いて豆撒き、そして雪が降れば雪合戦。

あつぱん授業のない日が多いと感じられたそうだが、勉強のほうは進学校としてかなりの詰め込み教育だったということ。詰め込みでありながら、いっしょうで諸行事を通して幅のある、ゆとりある教育が行われた当時を振り返って、氏は「面白かったですよ、

あの学校というのは、何らに定められた仕事でなく変わっててね。全てがよかつたわけではないけれども、思い出さずにはいけないものが残りましてね」とおっしゃる。現在の高校生についてどのようにお考えかと伺うと、即座に「概念的に大ざっぱにはつかまえてはいけないと思う。中・高校生というのは波動的な幅の度合いが激しい年齢層です。自分の能力を早く発見する奴もいるし、容易に発見できない奴もいる。ずつと後になって俄かに頭がシャープになる奴もいるんですよ」という答えが返ってきた。若者を概念的に大ざっぱにとらえず、個を大切にみる、そこに氏の作家の目、僧侶の目、自由な人間の目が窺われた。

住職として作家としてお寺の跡取り息子として生をうけた寺内氏にとって、住職は生まれながらに定められた仕事であつた。それを受け入れると同時に、自分の意志で選んだ仕事を一生、サイドワークとして持とうと決心された。六中時代スポーツ万能だった氏は、最初にスポーツを志したが後に体調を崩されて断念、好きだった小説へ方向転換。「日本でいちばん多く小説を読む人間になろう」と出発したのが、サイドワークの文筆業が結果として、宗家としての活動拡大に重要な役割を果たしている。本を通して多くの人に語れるから。本業と副業を両輪に「これからはライフワークを」と微笑む氏の黒染めの衣の内に、大きなエネルギーを感じた。

なお、このインタビューの内容を、付録として本紙と一緒にお届けいたします。ぜひご感想をお寄せください。